

報徳教育の錬成論的な形成と展開

—加藤仁平のイデオログ性に着目して—

須田将司*

本稿は、二宮尊徳の農村復興をモデルに児童・成人層の日常生活指導を展開した「報徳教育」が、1930～40年代に報徳思想それ自体の教育学的探究と、官製運動や錬成との適合という二面性をもって展開した点に着目する研究の一つである。戦後の教育学・教育史上において報徳教育は「日本教育学」や総力戦体制を翼賛した実践の一つと見なされてきた。本稿は、教育学者としてこれを主導した東京文理科大学・加藤仁平の言説に着目し、彼が報徳経済学研究会や報徳教育会における「コミュニケーション行為の産物」として、錬成に適合的な理論を補強していったことを明らかとした。1937年以降、「日本学」「日本経済学」を志向する報徳経済学研究会へ参加した加藤は、教育学者である自らの役割を捉え直し「報徳教育学」の組織化を着想する。1940年には報徳教育会を結成して学者・実践者らの交流の場を形成した。その過程で加藤は「新興報徳教育」を「皇道報徳教育」と言い換え、教員が学校内外で「常会」に取り組むことが「新体制」下の「教育家の使命」と論じ立てていったのである。

キーワード：報徳教育／加藤仁平／錬成／報徳教育会／報徳経済学研究会

はじめに

1930年代から1940年代前半という昭和戦前・戦中期は、昭和恐慌から戦時に至る「非常時」のなかで、官民を問わず教育実践・教育学の在り方が再考された時代であった。本研究は、報徳思想を援用した国民教化・教育実践を構想した「報徳教育」（以下「」略）が、総力戦体制化と軌を一にして時局適合的・錬成論的に展開していく過程を教育学者の言説に着目して解明しようとするものである。

戦後の教育学・教育史上において報徳教育は「日本教育学」や総力戦体制を翼賛した実践の一つと見なされてきた。最も典型的なものとして、滝原俊彦「日本の教育学のイデオログ」における東京文理科大学・加藤仁平に対する以下のような論調を挙げることができる¹。

中日戦争がおこると、かれは、日本の中国侵略を合理化し、世界制覇にまで触れるにい

たっている。そして、侵略のために、国民の一致協力を要求し、国民の天皇および国家権力に対する絶対服従を説き、それに必要な言論だけを合理化し、それらを達する教育として報徳教育なるものを提唱したのである。(中略) 加藤の尊徳研究と報徳教育の推進は、科学的というものからほど遠い、まさしく殉教者の信念的なものであった。(中略) 加藤は、尊徳の歴史的社会的条件を無視して、超歴史的な理念に昇華させてしまい、現実への無条件適用を信奉したのである。(中略) 現実の国家独占資本主義の内部法則に照らして、「報徳の信念」とか、「無条件的愛」が一体なことを意味したであろうか。そしておそらくかれはそうした視点をまったく欠いていたということができる。

きわめて断罪的に、その教育学研究の姿勢と方向性の限界を指摘している。加藤仁平も1957年の自著で「日華事変や、太平洋戦争とともに、国体明

*すだ まさし 東洋大学文学部教育学科

徴や国民精神文化の運動がおこってくると、世をあげて観念は空転して、右へ右へと、いくらでも言葉や文字の上で偏っていった。今、よみ返してみると、私の著書にも、そうした影響はまぬがれなかった。お恥ずかしいことである』と振り返っており、報徳教育が錬成論的に展開していった事実は疑いようもない。近年の日本諸学振興委員会に関する研究でも、加藤仁平及びその報徳教育研究は「日本教育学」の一つとして位置付けられており、滝原の見解が踏襲されている³。

しかしながら、加藤仁平のイデオログ性を強調するあまり二つの意味で報徳教育の実像を捉え損ねる結果もまた生み出されたと考えられる。第一は、加藤に先んじて存在した教育実践の存在と意義に関する研究視角を閑却してしまった点であり、第二には加藤の周囲に存在した報徳教育の情報回路が捉えられてこなかった点である。

第一点目に関して、筆者はこれまで富山・栃木・島根・神奈川の事例研究を重ね合わせる中で、1930年代半ばまでに報徳教育の理論と実践が生み出され、教育会雑誌や出版物に登場した論稿のなかから報徳思想の「天道一人道」論を援用して子どもの「個性」を「天道」、教師の働きかけを「人道」と見立てる「学校仕法」論の存在を見出している⁴。これは近年、臨床教育学研究者・中桐万里子が「天道によってもたらされるある種の限定性（どうしようもなさ）に積極的に向き合い、それを「徳」と呼んで受け取りつつ生産性（共生的活かし合いとしての生産性）へと転回しようとする尊徳の「報徳」モチーフを見出したこと⁵に符合するものといえる。眼前に広がる状況に対して「生産性」を見出していく教育学的考察が、既に昭和戦前期の教育実践者によってなされていたことになる。この点を加藤仁平はいかに捉えていたのか、否か。2014年刊の『日本教育学の系譜』において教育哲学研究者の小笠原道雄、森田尚人、矢野智司、田中毎実が「日本教育学」に類する「教育学説をあくまで理論内在的に分析すること」で読み直す研究視角を提起したことと同様に、本稿では加藤仁平の著作群を、それ以前の「学校仕法」論の存在を前提に置きつつ読み直し、報徳教育の形成と展開の実相に迫ってみたい⁶。

その際、高橋陽一が『日本教育学の系譜』に寄せた書評で「内在的」という言葉が属人的思想研究に傾くのではなく、研究対象をコミュニケー

ション行為の産物または公共財としての学説とする設定が重要になる』⁷と述べた点は、第二点目に関わりきわめて示唆的である。加藤仁平は①「新興報徳運動」と接点を有し、②日本諸学振興委員会第一回教育学会で「報徳教育」と題する研究発表を行い、③報徳経済学研究会に積極的に参加し、④1940年には報徳教育会を組織して『皇道報徳教育』を創刊する、といったように報徳運動家や官僚・行政関係者・学者らとの人脉や関係性のなかで報徳教育を論じ立てていった。この過程で1930年代半ばまでに模索されてきた報徳教育の実践と言説が、いかに捉えられ、価値付けや切り捨てが行われて、錬成論的にアレンジされたのだろうか。

以下、こうした研究視角から加藤仁平が報徳研究にのめり込んでいった1934（昭和9）年12月以降の経緯（表1）を辿っていくこととしたい。

1、「新興報徳運動」の影響を受けた「報徳教育」論の提唱

(1)「新興報徳運動」との接点

加藤仁平は1937年6月12日の報徳経済学研究会において、自らの報徳研究への没入を「考証的より文化史的になり、教育精神史的になったのが、やがて報徳に入り、報徳史観に入るようになった」と説明している⁸。その概要は、考証的研究で「先輩学者を叩くといふ様な浅ましい事」を感じ取り、文化史的研究で「批判的な冷やかさ」を感じてきたのだが、中江藤樹の研究で「研究即修養、修養即研究と云つた様な事を、藤樹先生の教育精神と共に感得し」、それ以後も吉田松陰、二宮尊徳の研究で同様な経験を経て「報徳的な教学を考へるやうになった」というものである。滝原の指摘する「信念的」な研究スタイルは、加藤の「研究即修養、修養即研究」への強い志向性に依るものであることを窺うことができよう。

1934年12月に栃木出張の機会を得て「先生の遺跡を巡礼し、且つは衷心の感謝を献じ且つは教育史的研究の端緒を得ることにつとめた」加藤は、「その後十ヶ月、優れた報徳人とも交わり（中略）二宮尊徳全集を読み進め」、1935年には東京文理科大学教育学会編輯『教育学研究』に三回シリーズで36歳までの尊徳の半生をまとめた「二宮尊徳に於ける教育精神の進展」を連載している⁹。ここで挙げられている「優れた報徳人」とは大日本報徳社副社長・佐々井信太郎であった¹⁰。加藤は

表1 加藤仁平の略年表 (1934~1948)

西暦 (年号)	出来事・業績	年齢
1934 (昭和9)	12月：二宮尊徳の研究を開始	41
1935 (昭和10)	～10月：大日本報徳社・佐々井信太郎らと交流 10月20日：新潟県黒崎村の二宮尊徳八十年祭に出講 11月9～12月8日：横浜新興倶楽部における長期講習会に参加、佐々井に傾倒	42
1936 (昭和11)	2月：小西重直の代理として朝鮮出講 7月：二宮尊徳生誕百五十年記念の講習会に出講、薫風勤労学校長小森俊一と出会い、大阪今宮貧民窟の教育に関心をもつ 11月6日：日本諸学振興委員会第一回教育学会にて研究発表「報徳教育」 12月：報徳経済学研究会組織化はじまり加入	43
1937 (昭和12)	東京保母伝習所、日本大学専門部工科、大東文化学院へ出講を辞退し、文理大・高師および報徳による全国的な社会教育へ没入	44
1938 (昭和13)	1月：『新興報徳教育』同文書院、刊行 8月：朝鮮江原道主催教学刷新講習会に出講	45
1939 (昭和14)	8月：愛知県幡豆郡吉田町宮在海岸での二週間講習、講師として加藤勝也、田中茂一、半義雄三らが協力する	46
1940 (昭和15)	4月6日：日本教育学会創立に参画 9月：『皇道報徳教育』発刊、報徳教育会の活動 10月：『二宮尊徳と皇道報徳』弘文堂、刊行	47
1941 (昭和16)	6月：『日本新興報徳の実行力』第一書房、刊行 8月：愛知県安岐町において大日本報徳振興会愛知県支部主催の報徳講習会。講師として加藤勝也、田中茂一両氏の協力	48
1942 (昭和17)	11月：朝鮮総督府塩田農林局長にまぬかれ、急を告げる半島の食糧問題解決のための渡鮮、巡講、田中茂一、草刈善造両氏の同行	49
1943 (昭和18)	10月14日：東京文理科大学教授兼東京高等師範学校教授 10月20日教育学教室主任、東京文理科大学教育学会長	50
1944 (昭和19)	8月16日：文学博士 (慶應義塾大学)	51
1945 (昭和20)	8月25日：復員軍人補導の指導精神として報徳を陸軍次官若松只一中将に説く	52
1946 (昭和21)	3月30日：財団法人巣鴨学園理事就任 6月1日：GHQ新聞課長インボーデン少佐を大日本報徳社に案内 6月11日：同氏を高松宮家に案内 12月11日：文官分限令により休職の通達	53
1947 (昭和22)	6月22日：教職追放される 9月1日：東京にて報徳同志会を創立、常務理事となる	54
1948 (昭和23)	4月1日：報徳同志会機関紙『民主報徳』創刊、主幹となる 5月5日：公職を追放される	55

※『加藤仁平先生還暦祝賀会記念誌』(1957年、11～22頁)、加藤仁平『自伝―報徳教育の第一歩』龍溪書舎、318～329頁)及び本研究記載事項から作成。

佐々井との縁のなかで急速に報徳に没入していくこととなる。その第一は、佐々井から新潟県西蒲原郡黒崎村における二宮尊徳八十年祭(1935年10月20日)の講演代りを頼まれたことである。同村は1934年以来、大日本報徳社の長期講習会受講者により、政争の解消と恐慌脱出の負債整理に取り組んできた「新興報徳運動」の先駆的事例であり、その實際を目の当たりにした加藤は「報徳に就ての真の味を知りかけた」、「一転機」であったと述

べている¹¹⁾。

第二には翌11月9日～12月8日まで横浜で行われた埼玉県主催第一回国民精神建直し指導者講習会に「可能な限り出席した」ことである。ここで加藤は佐々井に「二宮大先生の指導振りを偲ぶ」とまで感動することとなった。以後、「横浜新興倶楽部で一年に数回開かれた講習会には毎日、新興倶楽部に泊りこんで、この会場と勤務先きの東京文理科大学との間を往復して自宅に帰ったの

は、月にたった一回というほどの熱意で佐々井先生に随従¹²したという。

佐々井との交流を通じて「新興報徳運動」の展開と熱気に影響を強くうけた加藤は、1935年12月の長野出張の際に農村疲弊の現状を知り、翌1936年2月の『信濃教育』に「信州青年教育家の至誠に訴ふ」を寄稿している¹³。そこで加藤は「富山立ち埼玉立ち福島立ち、將に新潟・栃木・島根の立ち上がらんとする時」と冒頭に述べ、富山県の小学校を例に挙げ「学校を報徳化して行けば校長は職員を監督する必要がなくなり、職員は生徒児童を監督する必要がなくなります。報徳精神の充ち溢れた教育家の教へ子は（中略）政治家になつても党利党略を事としなくなり、産業組合員になつても組合に恩返しする人間になります。学童の腹の底から報徳心が湧き立つ時、家庭を浄化する結果を齎します」と述べていた。報徳による人間形成の意義を述べたものと言えるが、当時富山県内に生み出されていた学校報徳社・児童常会や「学校仕法」論には、いまだ一切触れるものではなかった。

(2) 「報徳教育」論の提唱

加藤仁平は1936年11月の日本諸学振興委員会第一回教育学会で研究発表「報徳教育」を行い、この間の報徳教育研究の成果を論じている¹⁴。報徳教育の要旨を「試みに纏めた文章」として、「宇宙の大法に本づき、皇国の精神に則り、勤労、分度、推譲、之を貫くに報徳を以てし、救急、復興、開発、永安、組織の様式を教化し、一円融合以て天壤無窮の皇運を扶翼し奉る可し」を掲げ、「宇宙の大法」を天道、「皇国の精神」を人道ととえている。ここには子どもの個性を「天道」、教師の働きかけを「人道」とする「学校仕法」論とは全く異なる姿が論じられていた。

近代日本思想史研究者・見城悌治は「近代報徳思想の最大の特徴が、天皇制思想との融和」であり、佐々井信太郎の言説から「尊徳が主張していた「一円融合」思想や「分度」「推譲」による村落復興法を、昭和初期の社会環境に見合った形で再編成再利用するとともに、「皇国の大道」をも示すものという絶対的な付加価値を付けたのが、戦時下報徳思想の特色」¹⁵と述べているが、加藤の報徳教育論は佐々井の影響を色濃く受けた戦時下報徳思想の典型例であった。加藤は「私見であ

ります」と断ったうえで以下のような「組織の一例」を掲げている。

現下の非常時局に対する国策を一元化し、内閣各省の協力一致と、道府県内一円融合の力を以て、全国各道府県にそれぞれ一千人の報徳指導者（例へば従来静岡県掛川又は横浜に一ヶ月乃至一ヶ月半開催されたる「国民生活建直し指導者講習会」修了者の如き）と、三日間講習程度の報徳理解者一万人とを養成し、これ等を中心として家庭生活を部落に拡大強化させ、行政並に結社式による報徳教化を徹底せしめ、全国民を利権争奪私利私欲の人生観より百八十度転回させ、日夜天地人三才の恩徳に報ゆる為、勤労、分度、推譲、一円融合の生活を楽しむやうに指導し、公私各方面に亘る救急、復興、開発、永安の生活様式を体得せしめ、皇国をして精神的にも経済的にも政治的にも軍事的にも外交的にも理想的真楽境たらしむべきこと

いわば「新興報徳運動」を国策化し、長期講習会を基点として「家庭生活を部落に拡大強化させ」、「私利私欲の人生観より百八十度転回させ」ようにとするものであった。その末に得られる「理想的真楽境」とは極めて国家主義的な社会像であったと言わざるを得ない。加藤は「おのが子を恵む心を法とせば学ばずとも道に至らむ」という尊徳の道歌をひき、「損得を忘れて無条件な愛を以て我が子の美点長所を育成せんとする親心を一般の社会生活に拡充する」ことを掲げるが、そこには我慢や滅私奉公を強い、個人主義から全体主義への転回を支える家庭教育・学校教育の姿がイメージされていたと言えよう。

2、報徳経済学研究会への参加と「報徳教育学」の構想化

(1) 報徳経済学研究会の結成

「新興報徳運動」と加藤との接点は、1936年12月に大日本報徳社社長・一木喜徳郎や副社長・佐々井信太郎、文部省・伊東延吉らが組織した「報徳経済学研究会」への加入に繋がる。発起人の一人・遠山信一郎は1938年の自著で「日本精神高揚の時代にあつて、日本独特の経済学を鮮明するは最も必要にして、国家百年の大計なりとし、茲に日本

経済学を樹立せんとした」組織であると述べ、以下の会則を紹介している¹⁶。

報徳経済学研究会

一、目的

二宮尊徳ノ経済道徳ニ関スル原理ヲ研究シ現代日本ノ国家社会ニ適合スル報徳経済学ノ樹立ヲ目的トシ、コレガ為会員相互ノ研鑽トソノ研究ノ発表トヲナスモノトス

前項ノ目的ヲ達成スル為左ノ事項ヲ行フ

- (1) 報徳経済学研究上ノ意見ヲ交換スルコト
- (2) 研究ヲ適当ノ方法ニヨリ発表スルコト
- (3) 機関誌ヲ刊行スルコト
- (4) ソノ他必要ト認メタル事項ヲ実行スルコト

二、会員

実行委員並実行委員会ノ推薦シタル物

三、役員

会長一名、常務委員三名、幹事二名トス

会長ハ会務ヲ統理シ常務委員ハ会長ヲ補佐シ幹事ハ庶務ヲ処理ス

会長事故アル時ハ常務委員ノ一人コレヲ代理ス

会長ハ中央報徳会理事長ヲ推シ常務委員ハ

会長コレヲ指名ス、幹事二名中一名ハ文部省関係官吏トシ他ノ一名ハ中央報徳会幹事ヲ以テ之ニ充ツ

四、会合

毎月一回第一土曜日午後一時ヨリトシ、臨時研究会ノ開催ヲ妨ゲザルモノトス

五、会ノ経費

七二〇円（会合費）毎月一回一人二円三十人分

一二〇〇円（機関誌刊行費）一部拾銭一千部 印刷月一回発行

一三〇〇円（研究物補助費）三人月百円一年分

一八〇円（雑費）

三三〇〇円（合計）

実行委員

一木喜徳郎 中川望 岡本英太郎

大久保利武 大村清一 鶴見左吉雄

松井茂 後藤文夫 石黒忠篤

関屋龍吉 伊東延吉 菊池豊三郎

佐々井信太郎 石井光雄 香坂昌康

有賀長文 松岡忠一 遠山信一郎

実行委員会ガ本人ノ内諾ヲ得テ推薦スル者（後略）

表2 報徳経済学研究会開催一覧

回	開催年月日	発表者・内容
第一回 実行 委員会	1936年12月26日	「文部省専門学務局長伊東延吉、同普通学務局長菊池豊三郎、内務省警保局長大村誠一、中央報徳会理事中川望、国民精神文化研究所長関屋龍吉、大日本報徳社副社長佐々井信太郎の発起による」（『大日本報徳』第418号、1937年3月）。計画案の協議。
第二回 実行委	1937年1月12日	会則協議
1	1937年2月19日	佐々井信太郎「向後の研究方針協議報徳思想普及状況に就て」（本会設立の経緯、設立趣旨説明、気炎撮影、次回以降の開催日時、場所、方法の協議）
2	1937年3月13日	佐々井信太郎「報徳ノ研究資料ニ付テ」
3	1937年4月10日	小出孝三「日本経済学と二宮尊徳翁」（佐々井信太郎「盛衰貧富の根源に関する二宮翁の考察」）
4	1937年5月8日	高須虎六「無利息金融通に就て」
5	1937年6月12日	加藤仁平「日本教育史研究と報徳」、参加者29名
6	1937年7月10日	佐々井信太郎「二宮翁の人生観中皇国の大道に関する一斑」、参加者26名
7	1937年9月18日	石川謙「近世社会教育史上に於ける報徳教化」
8	1937年10月9日	国民工業学院理事長・井上角五郎「二宮尊徳先生と工業」
9	1937年11月13日	矢部善兵衛「報徳式商店経営の体験に基づく我国経済生活の批判」
10	1937年12月11日	土方成美「矢部氏の所説を讀みて」（山本勝一氏と佐々井氏の問答）
11	1938年1月22日	東京帝国大学教授田邊忠男「矢部氏の報告に対する批判」（佐々井氏の座談的な二宮翁の偉業、陸軍中将佐藤清勝氏の二宮翁の経済学者・哲学者評、鈴木重雄氏の足利時代における貨幣改鑄の遠隔、山本勝市氏の利息に関する学説概要）

12	1938年2月12日	研究会員一同「報徳懇談会」(東京帝国大学教授田邊忠男、矢部善兵衛氏の所説に対して批評)
13	1938年3月12日	東京帝国大学教授経済学博士本位田祥男「協同経済学の理論」
14	1938年4月9日	鈴木重雄「日本精神(即報徳精神)の哲学的構造」、一木会長他30名
15	1938年5月14日	広島文理科大学教授西晋一郎「二宮尊徳翁の思想に就て」(西博士・本位田博士・佐藤清勝氏の問答。井上角五郎氏「二宮先生の思想と生活安定」、一木会長他54名)
16	1938年6月11日	佐々井信太郎「空仁二名論稿に就て」、出席者中川常務他30名
17	1938年7月9日	矢部善兵衛「空仁二名論稿所感」
18	1938年9月17日	国民精神文化研究所員小出孝三「空仁二名論稿より観たる分度思想に就て」
19	1938年10月8日	明治大学教授鈴木龍司「尊徳先生実践の原理としての空仁」
20	1938年11月13日	難波田春夫「日本経済学建設に就ての私見」
21	1938年12月10日	佐々井信太郎「時局と報徳」
22	1939年1月21日	法政大学教授小野武夫「二宮尊徳翁より見たる佐藤信淵の思想」
23	1939年2月18日	慶応義塾大学教授加田哲二「明治に於ける日本的経済思想」、傍聴者十数名
24	1939年3月11日	東京商科大学教授上田辰之助「全体主義と報徳経済」(小出、矢部、内池、佐々井との間に問答あり。傍聴者13名)
25	1939年4月5日	国民精神文化研究所員山本勝市「計画経済の根本問題」(傍聴者十数名)
26	1939年5月12日	農村更生協合理事杉野忠夫「農業生産力拡充と報徳」(傍聴者十名)
27	1939年6月10日	佐々井信太郎「常会の本義と其の運営」(傍聴者十数名)
28	1939年7月8日	松井茂「時局下に於ける報徳精神周知方法」(傍聴者十数名)
29	1939年9月9日	高松宮囑託天谷虎太郎「農村に於ける報徳精神」(傍聴者十名)
30	1939年10月14日	中央教化団体連合会主事宮西一積「二宮先生の道徳思想」(傍聴者十数名)
31	1939年11月18日	陸軍中將佐藤清勝「理の哲学と道の哲学」(傍聴者数名)
32	1939年12月9日	佐々井信太郎「報徳思想の根源としての皇国精神」(山本氏、林氏の質疑。加藤氏、山本氏ほかから次回も佐々井との希望あり。傍聴者十数名)
33	1940年1月13日	佐々井信太郎「報徳生活様式による皇道実現の組織」(山口市、加藤氏から質問あり。中川、松井両氏から国民精神総動員委員会における報徳思想普及に関する報告あり。傍聴者11名)
34	1940年2月10日	東京商科大学教授上田辰之助「報徳主義より観たる東亜新秩序」(傍聴者十数名)
35	1940年3月9日	法政大学教授小野武夫「満州農業開拓の現状」(傍聴者数名)
36	1940年4月13日	東京商科大学助教授板垣與一「独逸政治経済学の問題特に「ゴツトル」に就て」(一木、佐々井、難波田、小出、宮瀬、上田、岩井諸氏との間で質疑応答あり。傍聴者数名)
37	1940年5月11日	岩井主蔵「全体主義経済学を概説して報徳経済学に及ぶ」(小出、板垣、佐々井諸氏との間に質疑応答あり。傍聴者十数名)
38	1940年6月8日	小出孝三「経済倫理に就て」(松井、内池、小野、岩井、米山諸氏と質疑応答あり。傍聴者数名)
39	1940年7月13日	佐々井信太郎「満州国開発の実状と報徳仕法」(上田、内池諸氏と質疑応答)
40	1940年9月14日	佐々井信太郎「新体制の意義とその実例としての報徳生活」に関する懇談会(傍聴者若干名)
41	1940年10月12日	研究会員一同「新体制と報徳生活に関する懇談会発表会」(佐藤清勝、皆川治廣、加藤仁平、佐々井、京野、森田熊吉の発言あり。傍聴者9名)
42	1940年11月9日	研究会員一同「新体制と報徳生活に関する懇談会発表会」(露木清司、大分県総務部長相野田彌平の話あり。傍聴者7名)
43	1940年12月14日	研究会員一同「新体制と報徳生活に関する懇談会発表会」(京野、伊東の話あり)
44	1941年1月11日	内池廉吉「経済新体制に就て」
45	1941年2月8日	上田辰之助「報徳主義に於ける動的論理-新体制との関連に於ける若干の感想」(傍聴者11名)
46	1941年3月8日	岩井主蔵「二宮翁夜話に現はれたる経済倫理に就て」(佐藤、小出氏との質疑応答あり)
47	1941年4月12日	京野正樹「農村組織と報徳」(千石、中川、佐々井、岩井諸氏の意見発表あり。傍聴者3名)
48	1941年5月10日	田中次男「経済に於ける自然と人間」(上田、佐々井、笠森、皆川らと質疑応答、傍聴者2名)
49	1941年6月14日	東京商科大学助教授板垣與一「植民政策と民族問題」(傍聴者7名)

50	1941年7月12日	大日本報徳社副社長佐々井信太郎「報徳生活に於ける経済倫理に就て」(内池、上田、宮西、小出、中込諸氏と質疑応答、傍聴者7名)
51	1941年9月10日	稲垣正信「幕末の経済事情と尊徳翁」(小野、小出、露木との質疑応答。中川氏より小田原に催された尊徳会発会式の状況報告、河井氏より時局対策甘藷栽培奨励の報告。傍聴者10名)
52	1941年10月11日	経済学博士上田辰之助「報徳的社会機構に就て」(加藤、石原両氏との質疑応答)
53	1941年11月8日	佐々井信太郎「町村融合経営に就て」(傍聴者数名)
54	1941年12月13日	法学士岩田松太郎「国民組織再編成と部落会町内会」(傍聴者10名)
55	1942年1月17日	日本文化協会囑託岩井主蔵「しろしめすつかへまつらふつくしび」(参加者名無し)
56	1942年2月14日	鈴木重雄「我国本然の世界観に就て」(上田、小出、佐々井、岩井氏との質疑応答あり。傍聴者3名)
57	1942年3月14日	京野正樹「農村問題の新視点」(小出、佐々井、皆川、笠森、森田、中川氏と質疑応答あり。傍聴3名)
58	1942年4月11日	島根県女子師範学校教諭文学士田中茂一「教学及其の指導体系の再建設と報徳」(小出、佐々井、矢部、加藤諸氏との間に質疑応答)
59	1942年5月9日	陸軍中将佐藤清勝「日本哲学の構造」(加藤、皆川、佐々井、矢部との間に質疑応答)
60	1942年6月13日	皆川治廣「皇国の道」(傍聴者数名)
61	1942年7月11日	東京文理科大学助教授加藤仁平「朝鮮の農村、大阪の貧民窟、東京の学園等に於ける最近の報徳教育に就て」
62	1942年9月12日	石川県師範学校教諭飯塚銀次「二宮尊徳の教学思想」(佐々井と質疑応答。傍聴者6名)
63	1942年10月10日	東京文理科大学生大木春基「報徳と儒教」(準備の都合上、現在東京文理科大学附属中学校職員としての体験。上田、佐々井、加藤諸氏との質疑応答。参加者名無し)
64	1942年11月14日	遠山信一郎「満州建国十周年と報徳道」(佐々井、加藤、森田、皆川、中川、京野諸氏と質疑応答。参加者名無し)
65	1942年12月12日	建武義会幹事杉山最勇「現下の経済問題と報徳道」(小出、佐々井との質疑応答。参加者名無し)
66	1943年1月9日	加藤仁平「現下朝鮮の食糧問題と新興報徳」(佐々井、小出、内池、持地の質疑応答。参加者名無し)
67	1943年2月13日	島根県女子師範学校校長渡邊平三郎「現代行政機構の皇道実現様式一般問題」(佐藤清勝、加藤仁平、矢部、田中茂一らの質疑応答。傍聴者38名)
68	1943年3月13日	神戸市立第一神港商業学校教諭松本有賀雄「渡辺華山の商人訓と新商人道」(佐々井、矢部、小出と質疑応答。参加者名無し)
69	1943年7月10日	佐々井信太郎「満州朝鮮に於ける報徳道の現状」

※「報徳経済学研究会発表者及び研究題目一覧」(報徳経済学研究会編『報徳経済学研究』第一輯、理想社、1943年、10~14頁)と『斯民』誌上における報告から作成。

※網掛けは加藤仁平及び東京文理科大学卒業生の報告(加藤仁平『報徳に生きる』日本図書文化協会、1957年、131~132頁参照)。

会則と開催一覧(表2)を合わせてみると、中央報徳会幹事と文部省関係官吏を幹事に据えつつ、政治家・官僚、そして経済学者以外にも報徳思想に親和的な哲学者・教育学者らを糾合した組織体であったことがわかる¹⁷。主な参加者の動向(表3)からは、出席・発言ともに最多の佐々井信太郎が主導し、実行委員の中川望や一木喜徳郎らが運営をサポートする構図が浮かび上がってくる。中川望は、1943年にそれまでの歩みを振り返り、以下のように学者・学校教育との接点を「業績」として挙げている¹⁸。

殊に上田庄之助氏の『経済人・職分人』には

全般に亘つて報徳思想気分が輝き、最近に於ける小出幸三氏の『産業の道』は全編報徳経済思想を以て一貫したものと認められる。岩井正蔵氏、京野正樹氏の種々の論文は亦報徳思想の咀嚼顕著なる姿を示されたものである。其他経済及政治に直接関係せざる著書にして報徳思潮に関するものは、加藤仁平氏の『新興報徳教育』、『新興報徳の実行力』(筆者注：『日本新興報徳の実行力』)遠山信一郎氏の『日本精神と新興報徳』等があるが其の内容は、報徳経済学研究会に関連するものが少なくない。

学校教育の上に及ぼしたる影響も亦之を挙

表3 報徳経済学研究会への参加動向 (上位10名)

順位	氏名	出席回数	発表回数	当時の職名等
1	佐々井信太郎	56	13	大日本報徳社副社長、中央教化団体連合会参与、実行委員
2	小出孝三	48	2	国民精神文化研究所員、大日本新興報徳会幹事、当初からの研究会員
3	加藤仁平	42	3	東京文理科大学助教授、大日本報徳社講師、当初からの研究会員
4	中川望	43	0	中央報徳会理事長、実行委員
5	矢部善兵衛	38	2	大日本新興報徳会幹事、大日本報徳社講師、当初からの研究会員
6	露木清司	37	0	大日本報徳社講師、当初からの研究会員
7	草山惇造	30	0	報徳二宮神社宮司、大日本報徳社講師、当初からの研究会員
8	牧野豊三郎	28	0	大日本新興報徳会幹事、当初からの研究会員
9	森田熊吉	26	0	埼玉県振興報徳会理事、当初からの研究会員
10	一木喜徳郎	24	0	大日本報徳社社長、実行委員
10	上田辰之助	20	4	東京商科大学教授

※出典は表1と同じ。順位は出席回数・発表回数の合計による。

※報徳経済学研究会開催69回に準備実行委員会2回を含め71回につき、『斯民』に開催報告が無いのは第44回と第69回のみであり、参加者名一覧が記載なかったものは第2回実行委員会、5、6、14、15、16、17、55、63、64、65、68の12回分があった。いずれも報告書から判明する限りカウントを加えたところ、119名が確認できた。

ぐることを得る。商科大学、文理科大学、農業大学等に於ける教授内容に織り込まれたる分量は各々その度を異にするけれども、学生が報徳経済学研究発表の席上傍聴に参集するものが少なからざるによりて推察し得る。その最も顕著なるは、加藤仁平氏の努力による東京文理大並に東京高等師範学校であらう。

ここで挙げられている5名はいずれも2回以上発表を行った人物であった。上田庄之助の「職分人」論を分析した経済史研究者・仁木良和は、佐々井信太郎の影響を強く受け、「おおよけ」と「わたくし」の対立しない、すなわち「公益」と「私益」の対立しない報徳主義こそ日本的な全体主義であると主張したことを捉えている¹⁹。報徳思想を採用した「全体主義」の強調という論理構造は、前節で捉えた加藤仁平の報徳教育論にも通底するものであり、ここに同研究会を覆っていた方向性を窺うことができる。

注目すべきは加藤仁平の少なからざる存在感である。その出席・発表回数は佐々井、小出に次いで3番目であり、1940年以降は自らの発表に加え、東京文理科大学卒業生4名の発表も確認できる(表2網掛)。加藤は報徳経済学研究会を研究成果の発表のみならず、後進育成の場として積極的に活用していたのである。

(2) 「報徳教育学」の構想化

加藤は1937年6月12日に「日本教育史研究と報徳」と題した報告を行っているが、そこに報徳教育論に関わって二つの特徴を見出すことができる。第一に「報徳は親心的な日本精神の真髓であるから、道もすれば排他排外的に陥り易い多くの日本精神論と違つてゐる」と強調していた点、第二に「全集の研究と、現在並びに将来の実績とを基礎として、此の研究を進めて行きたいと存じます。報徳経済学が組織される頃迄には、報徳教育学を組織立たいと願ひして居ります」と述べていた点である²⁰。ここには報徳経済学研究会の目指す「報徳経済学」に刺激を受け、教育学者として自らの役割を見出そうとしていた姿を捉えることができる。

加藤はその後、各地の実践情報を収集し、1937年に東京文理科大学教育学会編『教育学研究』第6巻第2号・3号・5号に「最近に於ける報徳教育の勃興」を連載し、翌1938年1月には『新興報徳教育』として刊本にまとめている²¹。同書第4章、第5章に挙げられた事例・人物等をまとめたのが表4であるが1933～34年度に先駆的に「新興報徳運動」や報徳教育実践が展開されていた富山県の多さが際立っている。この過程で加藤は「学校仕法」論や学校報徳社・児童常会を知り得たとみられ、同書では少なからぬ分量の紙幅を割いて紹介されていた²²。この調査研究を基に、加藤は

表4 『新興報徳運動』第4章「新興報徳の展望」第5章「新興報徳教育の諸様式と其の将来」の事例

道府県	事例・学校名・人物
富山県	富山県振興報徳社、学務部長遠山信一郎、社会教育主事藤田訓二、大布施村長森丘正唯、浅井村長麻生正蔵、小学校—北般若・鷹栖・女良・高波・二口・国吉・大布施・浅井、中等学校—上市農学校・砺波高等女学校及び同中田校長・神通中学校・氷見農学校・福野農学校、公民義塾—氷見・射水・下新川・福野等、青年団—黒河・道下・作道・下立、婦人会—鷹栖・北般若・林・高原、町村経営—大布施村・北般若村・鷹栖村・女良村・野積村・浅井村、農会及農家組合—東西砺波郡管下の農家組合、産業組合—大布施村、大山村文珠寺、北般若小学校長松田富雄、大布施小学校長細田清之助、鷹栖小学校長高島秀一、高波尋常高等小学校長矢木量平、富山県女子農村学園及富山県農会立家政学校、北般若小学校児童常会、鷹栖小学校児童常会、高波小学校模擬報徳社定款、射水郡大島村少年報徳会、大島小学校高橋校長
島根県	学務部長酒井栄吉
埼玉県	経済部長遠山信一郎、秩父工民報徳社、秩父工民道場、秩父郡久那村小学校、久那村青年学校校長塩谷松次郎、同堀口主席訓導
神奈川県	川崎報徳社、足柄上郡金田村牧野製糸工場・牧野豊三郎、前神奈川県技師露木清司、片倉製糸株式会社、足柄上郡教育会二宮先生研究部、桜井小学校長府川憲治、同訓導古屋安定、同校長米山要助
栃木県	栃木県尊徳会、学務部長相野田彌平、芳賀報徳社長柳田正一、芳賀郡物部尋常高等小学校、今市中学校、烏山中学校、同校椿教諭、宇都宮農学校、同渡邊教頭、真岡農学校、同狐塚清五郎校長、宇都宮商業学校、同笹森教諭・斎藤教諭・早乙女校長
福島県	矢部善兵衛、相馬郡太田尋常高等小学校長飯野次郎、同小学校誠心報徳会、耶麻郡教育部会、
新潟県	西蒲原郡黒崎村、同村負債整理組合、同教員会
宮城県	社会教育主事立花
愛知県	石巻公民学校
大分県	総務部長相野田彌平
福岡県	小倉師範学校および同附属小学校、同師範学校長角南元一
秋田県	下北手尋常高等小学校（秋田県女子師範学校代用附属小）校長小田島留吉
三重県	多気郡萩原村立高等公民学校、同校長中村三喜之助
茨城県	下館高等女学校、同校長大瀧正寛
静岡県	小笠農学校
大阪府	大阪市立徳風勤労学校長小森俊一、今宮報徳社

※加藤仁平『新興報徳教育』から。府県は初出の事例の順番で並べてある。

各種の教育雑誌に盛んに寄稿を行っていく。

1938年5月号の『教育学术界』²³では「昭和七八年以來の新興報徳の勃興と之に伴ふ新興報徳教育台頭の威力は、一部落一学校一町村の境を超えて、例へば富山、埼玉の如く、或は栃木、福島の如く、一県挙がっての一大運動を展開し、益々進展しては戦局をして有終の美を済さしめ、北支を愛撫し満州を育成し、東亜の安定を確保せしめて一円融合弥栄に」と述べている。「新興報徳運動」や「新興報徳教育」が、なにをもって「戦局をして有終の美」につながるのか。ここに、日中戦争開戦後にまぬがれ得なかったという「右へ右へ」の「空転」の端緒を捉えることができる。ここでもう一点特徴的なのは、多くの日本精神論が「理論は極めて明晰なるが如きも之を実施するに方途足らず」な点を批判し、翻って「原理と雛形と仕法と

を兼備」する「真に報徳教育の研究と実践を念とする」と述べていた点である。

同年9月に初等教育研究会『教育研究』に寄稿した論稿²⁴では、その「雛形と仕法」について明確な言及を行っている。「二宮先生が「芋こぢ」とよばれた教化常会を先づ職員会に応用し之を基礎として、全職員の一円融合の気分を進めて報徳精神の体認を深め、学校報徳社と児童常会とを運用して生徒児童を導き、町村役場、産業組合、農会、教化団体連合会等と協力して校下の各部落常会に進出して環境を改善し、或は校訓と村是とを一元化し、或は郷土教育に、或は開闢の大道としての労作教育に、諸教科の刷新に、或は模擬産業組合の指導等に報徳教化を徹底させるべき」と、学校報徳社・児童常会のほか、常会指導者としての教員像を掲げていた。これは『新興報徳教育』

で挙げた富山県の事例を概説したものであった。さらに加藤は同論で「荒れ地を開くに荒れ地の力を以てし、衰貧を救ふに衰貧の力を以てす、何ぞ財を用みんやとか不良少年は不良少年自身の力により、劣等生は劣等生自身のもつ個性的長所美点によつて起ち上り得る」とも述べていた。ここに「学校仕法」論に類する、実態に向き合い、これを「個性」や「徳」と見立てていく教育観を窺うことができる。「右へ右へ」と「空転」する一方で、富山県の実践例を念頭に理論・方法面での精緻化も同時進行していたといえる。

一方、1938年中は4月に佐々井の常会構想を反映させた「国民精神総動員実践綱要綱」が策定され、8月からは大日本報徳社の長期講習会も「国民生活建直し指導者講習会」から「国民精神総動員報徳式指導者講習会」へと名称変更している²⁵。また8月には長期講習会修了生の組織として「大日本新興報徳会」が結成され、加藤は幹事に就任している²⁶。政策と一体化を深めていく「新興報徳運動」の渦中に加藤は教育学者として存在していた。1938年11月の雑誌『道徳教育』に寄せた論稿²⁷では、「最近、各地に「報徳教育研究会」が創設され、報徳教育研究発表会も催されて」いる

ことを挙げ「報徳経済学、報徳教育学の組織もさまで遠からぬことであらう」と述べていた。各地の実践例を調査研究し、全国的なネットワークの渦中にあった加藤のなかで、「報徳教育学」の体系化と組織化が具体的な形として思い描かれ始めていたことが窺える。

3、1940年以降の報徳教育

(1) 報徳教育会結成と『皇道報徳教育』発刊

加藤の構想は1940年の「報徳教育会」結成に結実したとみられる。8月に発行された『皇道報徳教育』第一輯の執筆者を見ると(表5)、佐々井や加藤の他、多くが報徳経済学研究会員や『新興報徳教育』で加藤が名を挙げている人物(表4)であった。その後も『皇道報徳教育』誌上では学者・思想家の論説から小学校・青年学校・師範学校・官製運動など幅広い実践報告が交流され、なかでも愛知県石巻村・鈴木繁尾校長(第一輯)、東京府立青年学校教員養成所・箕岡教諭(第一～三輯)の青年教育における報徳教育実践や、秋田県下北手小学校・小田島校長(第一輯、第四輯)、東京府大泉師範学校・遠藤泰助(第一輯、第三輯)の実践は、1941年6月にまとめた『日本新興報徳

表5 『皇道報徳教育』の書誌情報

巻号 発行年月	目次	備考
第一輯 「皇民錬成原理 と方法」 1940年8月	(加藤仁平)「宣言」	
	大日本報徳社副社長・教育審議会委員・佐々井信太郎「報徳教育について」	報経研・『新報教』
	東京文理科大学助教授・加藤仁平「『二宮翁夜話』の精神とその稿本」	
	京都府立医科大学教授・戸山六郎「尊徳と孫右衛門」	学者
	中央教化団体連合会理事長・貴族院議員・法学博士・松井茂「報徳経済振興の機運」	学者・報経研・『新報教』
	文部省図書審議官・角南元一「国民学校と「報徳の道」」	官僚・『新報教』
	「二宮先生語録抄」	
	宮崎県総務部長・遠山信一郎「報徳道と教育」	官僚・報経研・『新報教』
	東京府学務部長・酒井栄吉「報徳教育の根本原理」	官僚・『新報教』
	大分県総務部長・相野田彌平「報徳と教育に関する所管と体験」	官僚・報経研・『新報教』
	加藤仁平「皇国開闢の譲道と報徳精神」	
	佐々井信太郎「報徳生活法の話(一)」	報経研・『新報教』
	東京府大泉師範学校教諭・遠藤泰助「現下教育の使命と報徳の教学」	教員・東京文理大卒
	東京府立青年学校教員養成所教諭・箕岡時彦「青年学校と報徳教育」	教員
	秋田県下北手小学校校長・小田島留吉「我校の報徳教育一般」	教員・『新報教』
	愛知県石巻公民学校校長・鈴木繁尾「報徳道に立ちあがるまで」	教員・『新報教』
	山本五十雄訳・加藤勝也註「英訳「二宮翁夜話」」	加藤勝也は文理大卒

第二輯 「皇道帰一の報徳生活」 (1940年9月)	皆川治廣「皇国の道と報徳精神」	官僚・報経研
	岡野徳右衛門「現代と二宮翁の思想」	
	戸山六郎「二宮仕法の科学性」	学者
	岡崎久彌「天祖開闢の道」	
	箕岡時彦「商業報徳運動の理論と実践」	教員
	角南元一「尊徳翁の横顔」	官僚・『新報教』
	山上曹源「行と信仰」	
	遠藤泰助「日本教育の帰趨」	教員・東京文理大卒
	「報徳入門講座(二)」	
「語録抄(二)」		
「英訳夜話(二)」		
第三輯 「報徳一貫の教学精神」 1940年10月	後藤文夫「二宮尊徳先生の真精神体现」	官僚・報経研
	東京文理科大学助教授・加藤仁平「稿本二宮翁夜話巻之一の研究」	
	京都府立医科大学教授戸山六郎「教育者としての二宮尊徳」	学者
	西川光二郎「端緒を上手に掴みし人」	
	大分県総務部長・相野田彌平「国民精神総動員運動の展開」	官僚・報経研・『新報教』
	食養会々長・櫻澤如一「健康と報徳「正しい食べ物」」	思想家
	「二宮先生語録抄(三)」	
	東京府大泉師範学校教諭・遠藤泰助「教育者と報徳精神」	教員・東京文理大卒
	東京府立青年学校教員養成所教諭・箕岡時彦「新体制と産業労働の再建」	教員・
佐々井信太郎「報徳生活法の話(三)」	報経研・『新報教』	
「英訳『二宮翁夜話(三)』		
第四輯 「臣道実践と報徳」 1940年11月	下程勇吉「二宮学の輪郭」	学者
	林学博士・本多静六「私の努力奮闘主義と改善生活」	学者
	櫻澤如一「報徳は物心一如の道なり」	思想家
	「二宮先生語録抄(四)」	
	河邊大介「報徳による道德観の更新」	
	小田島留吉「報徳少年常会の運営」	教員・『新報教』
	佐々井信太郎「報徳生活法の話(四)」	報経研・『新報教』
山縣五十雄訳「英訳『二宮翁夜話(四)』		
第五輯 「皇道具現と報徳精神」 1941年5月	渡邊幾治郎「報恩思想の史的考察」	学者
	下程勇吉「二宮尊徳の種々相」	学者
	西川光次郎「二宮尊徳先生に学ぶ」	
	大原二郎「自然の報徳を知る季節」	
	藤村亮「誠に根ざす我國民道德」	
	佐々井信太郎「報徳生活法の話(五)」	報経研・『新報教』
	弘津徹也「練成と季節」	
山縣五十雄訳「英訳『二宮翁夜話(五)』		

* 報徳教育会『皇道報徳教育』から作成。第二輯は未発見であり「(広告) 皇道報徳会「皇道報徳教育」(『朝日新聞』1940年10月11日付朝刊) から情報を採録。

* 備考：報経研＝報徳経済学研究会員、『新報教』＝『新興報徳教育』で紹介した人物である。

の実行力』にも採用されていった。加藤の人脈を生かす形で結成された報徳教育会が、報徳教育研究のすそ野を広げた側面があったことは間違いな

い。以下のような「読者会」の組織化によって、報徳教育研究のネットワーク化も構想されていたようである²⁸。

『皇道報徳教育』読者会の組織

報徳教育会は時局の重大性に鑑み、教育新革の機運に即応して、皇民錬成の原理と方法とを研究し実践するために、報徳道に立脚して講座「皇道報徳教育」の発刊をなし、併せて報徳関係図書を刊行したいと思つてゐます。この事業を達成する為には、全国各地の「皇道報徳教育」の読者諸君が報徳教育会と密接な連絡を保ち、地方情勢の具体的資料を報告して戴く事が最も肝要であります。そこで読者諸君は、各地で同志を糾合して読者会を結成され、中央の狼煙に呼応してご協力下さるやう御願ひ致します。読者会に就ては左記のやうな規約を作りました。

規

- 一、読者会は「皇道報徳教育」の直接購読者五人以上をもつて組織し、内責任者一人を置く。
- 二、責任者は会員の姓名履歴等を報徳教育会に報告して下さい。
- 三、読者会は「皇道報徳教育」をテキストとして定期的研究会をもち、地方の教育情勢及び読者会の活動状況等に就て、出来るだけ詳細に且つ頻繁に報告して下さい。本会はそれを誌上に掲載します。但し取扱はお任せ願ひます。
- 四、読者会が講演会又は座談会開催のために講師の派遣を求め、或は参考書籍類の取次を望む場合は、本会に照会して下さい。
- 五、本会は読者会からの質問に対しは、本誌上又は書面を以て責任ある回答を致します。
- 六、読者会々員の研究論文、学校又は職場に於ける報徳経営の実践報告、観察見学記、所感等は出来得る限り本誌上に掲載致します。

第一輯で加藤が「今日の報徳を、私は特に新興報徳教育と申します。更にその本質を明確にすれば皇道報徳教育と申すべき」²⁹と述べていたように、全体として錬成論との適合性を追究するベクトルを有していたこともまた間違いなかった。加藤による巻頭言「皇道報徳教育宣言」は「今日、澎湃として台頭せる新興報徳教育運動の實踐に原理と方法とを与へ、広く「皇国の道に則つて国民の基礎的錬成」に献身せんとする尽忠報国の至誠に燃え立つ全国教育家の不撓不屈の協力を得て（中略）皇国臣民並に東亞の諸民族を教化啓蒙、漸次世界の万国に推及し、聖旨奉体、尊皇絶対、一円融合生々発展。以て天壤無窮八紘一字の天業恢弘を翼賛し奉らん」と、「国民の基礎的錬成」や八紘一字との一体化を明言していた³⁰。この試みは当時の教育実践者や報徳運動家にどれ程の支持を得たのだろうか。管見の限り、表5にあるように『皇道報徳教育』は第5輯で途絶えており、加藤の自伝でも何も触れられていない³¹。加藤の「報徳教育学」構想は、その人脈とイニシアティブで一旦は結実しつつも、1941年以降は活動の停滞に追い込まれたと見てよいだろう。

(2) 新体制運動・国民学校令への対応

表2の1940年～1941年における報徳経済学研究会の内容からも明らかのように、当時において最も関心が寄せられたのは「新体制」への対応如何であった。

1940年10月12日の報徳経済学研究会「新体制と報徳生活に関する懇談会」³²において、加藤は「去る九月十一日安井内務大臣の名によつて公布されました内務省訓令第十七号（中略）是は実は佐々井先生の報徳淵叢を御覧になつた方は御気付きと思ひますが、あれは淵叢の中に先生が地方教化策として書かれたものが余程古くある、少なくとも六七年前に書かれて居ると思ひますが、其の中に報徳結社、報徳社と云つた所を抜けば殆どあれがあつた」と、佐々井の常会構想の政策化を歓迎する言葉を述べている。そして「私は教育関係でありますので」と研究会における自分の位置を前置きした上で、以下のように述べていた。

教育家のやらなければならぬことに就て考へさせられるのであります。来年から国民学校

案が実施されるのです。之も教育界の新体制であると見なければならぬが、それと共に国民学校案の中にも家庭と学校と社会との緊密な連関に就て力説してありますが、あゝ云ふ問題に就ても教育家にどうも本当のことが分つて居ないのであります。あれは矢張り学校の中に於て、職員常会であるとか、青少年の常会であるとか、学級の常会であるとか、部落常会であるとか、学校内の常会の運営と共に、斯う云ふ非常時には教育家は学校と家庭と社会の連繋の意味に於て、学校の中の教育の能率を挙げる為に、もう一つは自分達の力の余分を無理にも作つて、国家の恩に報いるために保護者に働き掛けなければならぬ

内務省訓令第17号と国民学校案の両者の「教育界の新体制」を前に、「教育家にどうも本当のことが分つて居ない」と批判の矛先を向けていた。いよいよ「常会」が国策化していくなかで、「無理にも」教員が常会指導者たるべきことが、強圧さを伴って語られていた。同年12月に東京文科大学教育学会編輯『教育学研究』に寄稿した「新体制下における教育家の使命」³³でも同様の論調を認めることができる。加藤は「昭和十五年十月二十四日、日本諸学振興委員会第二回教育学会」における「某中学校長の報告」を引用し、「準備教育は、生徒をして益々自己本位の思想及び行動に追ひ込み国家的精神、愛校的热情を失はしめ(中略)知行を乖離せしめ、真の知性の発達を阻害する(中略)之は中学校校長の実状であるが、かうした功利的・個人主義的な弊害は大学より小学校に至るまで多かれ少かれ現はれてゐる。茲に教学の根本的刷新が要請されねばならない」と述べていたのである。総力戦体制を前に否定されるべき受験準備教育の姿が明示され、その「根本的刷新」を掲げるところまでは一貫性があるといえよう。しかし、これに代わる教育観や方法論が論じられず、一転して「市町村常会隣保組織ニ深キ理解ヲ持チ積極的ニ協力援助」、「青少年ヲシテ青少年常会隣保組織ヲ結成セシメ協力互助ニ依ル国体ノ明徴、生活ノ刷新ヲ期ス」ことが「新体制下に於ける教育家の新使命」として掲げられていたのであった。ここには既に「学校仕法」論の残滓は無く、国策と直結し「右へ右へ」と教員を動員する「空転」の論理が強弁されていたのである。

おわりに

加藤仁平の報徳教育論は、佐々井との交流を通じて「新興報徳運動」の展開と熱気に影響を強くうけ、当初から報徳思想を援用した全体主義の傾向を強く有していた。「日本学」「日本経済学」を志向する報徳経済学研究会への参加は、加藤の自認を強固なものとし、「報徳教育学」の構想と組織化を促進し、1940年の報徳教育会の結成へと至る。この経緯を描き出したことが本稿の一成果と言ひ得る。

加藤は、その過程で1937年に全国的な実践例を調査し、富山県で生まれていた学校報徳社・児童常会や「学校仕法」論を知り、理論・方法の精緻化を掴んでいた。ここに報徳教育を教育学的に考察していく契機、加藤仁平のイデオログとしての岐路が存在していたといえる。「研究即修養、修養即研究」という志向をもつ加藤は、「新興報徳教育」を「皇道報徳教育」と言い換え、教員が学校内外で「常会」に取り組むことが「新体制」下の「教育家の使命」とし、錬成に適合的な言説を論じ立てていったのである³⁴。

本稿で照らし出された報徳教育をめぐる人脈は戦後も継続されていった。1957年刊の『報徳に生きる』では田中茂一(表2に記載あり、戦後は愛知学芸大学教授)による「新報徳教育の原理と方法」の模索、加藤勝也(表5に記載あり、戦後は東京教育大助教授)による神奈川県桜井小学校の報徳教育研究への関与が記載されている³⁵。表1から、田中茂一と加藤勝也は戦前から加藤仁平に帯同して報徳講習会を行った人物であることが確認できるが、彼らによって紡がれた戦後の報徳教育研究をいかに評価すべきか。その可能性や限界性を問うことが今後の課題である。

※本稿は、JSPS科研費25780489「昭和戦前期「報徳教育」の錬成的・教育学的展開に関する実証的研究」の助成を受け、日本教育学会第74回大会(お茶の水女子大学、2015年8月29日)で行った研究発表に加筆したものである。なお、資料調査に際し、宮城県白石市図書館奉仕整理係・櫻井和人氏に特段のご高配を賜った。ここに厚く感謝の意を表したい。

- 1 滝原俊彦「日本の教育学のイデオログ」(柳久雄・川合章編『現代日本の教育思想 戦前編』黎明書房、1962年、129～134頁)。
- 2 加藤仁平『報徳に生きる』日本図書文化協会、1957年、203頁。
- 3 山本敏子「日本諸学振興委員会教育学会と教育学の再編」(駒込武・川村肇・奈須恵子『戦時下学問の統制と動員—日本諸学振興委員会の研究—』東京大学出版会、2011年、330頁、348頁)。
- 4 拙著「1930年代における学校報徳社・児童常会の端緒—富山県下指定教化村の報徳教育に着目して—」(『日本の教育史学』第57集、2014年所収)で鷹栖小学校・高島秀一校長の「学校仕法」論を見出している。また拙著「1930年代半ばにおける「新興報徳運動」と報徳教育の広がり—栃木県・島根県下の実践と言説に着目して—」(『日本教育史学会紀要』第6巻、2016年所収)では、栃木・島根両県において「学校仕法」論に類する語りを獲得したがゆえに報徳教育に意義を見出していった教員らの姿を捉えている。
- 5 中桐万里子『臨床教育と〈語り〉—二宮尊徳の実践から—』京都大学学術出版会、2011年、219頁。
- 6 小笠原道雄、森田尚人、矢野智司、田中毎実『日本教育学の系譜—吉田熊次・篠原助市・長田新・森昭』勁草書房、2014年、7頁。
- 7 『教育学研究』第82巻第2号、2015年6月、145頁。
- 8 加藤仁平「日本教育史研究と報徳(上)」(『斯民』第32巻7号、1937年、113～122頁)。
- 9 加藤仁平「二宮尊徳に於ける教育精神の進展 その一、三十六歳までの栢山・小田原時代(上)」(東京文科大学教育学会編輯『教育学研究』第4巻第1号、1935年、115～116頁所収)。その後の連載は以下の通り。加藤「二宮尊徳に於ける教育精神の進展 その一、三十六歳までの栢山・小田原時代(中)」(『教育学研究』第4巻第2号、1935年、131～162頁所収)、加藤「二宮尊徳に於ける教育精神の進展 その一、三十六歳までの栢山・小田原時代(下)」(『教育学研究』第4巻第4号、1935年、405～433頁所収)。
- 10 「佐々井先生には(中略)度々お目にかゝつて色々御指導を頂いた」という(加藤仁平「日本教育史研究と報徳(中)」(『斯民』第32巻9号、1937年、116頁)。
- 11 加藤仁平「報徳講話二題(上)」(東京文科大学教育学会編輯『教育学研究』第4巻第11号、1936年、1285～1298頁所収)。
- 12 加藤仁平「佐々井信太郎先生と私(三)」(『民主報徳』第384号、報徳同志会新聞部、1980年3月1日第一面)。
- 13 加藤仁平「信州青年教育家の至誠に訴ふ」(『信濃教育』1936年2月、18～38頁)。
- 14 加藤仁平「報徳教育」(文部省教学局『日本諸学振興委員会研究報告 第一編(教育学)』1937年1月、190～197頁)。
- 15 見城梯治「近代報徳思想と日本社会」ペリかん社、2009年、345～347頁。
- 16 遠山信一郎「報徳経済学研究会」(吉地昌一『解説二宮尊徳翁全集』解説二宮尊徳翁全集刊行会、1938年(三版)、74頁)。八木繁樹『報徳運動100年のあゆみ』(緑陰書房、1980年、252～254頁)の記載もこれに準じている。
- 17 経済史研究者・仁木良和は「西洋の科学技術に対して日本の伝統的なものの中に指針を見出そうとするいわゆる「日本への回帰」の思想を見出すことも出来るかもしれない」と述べ、経済学に限らない議論と性格付けをしている。仁木良和「上田辰之助における報徳思想の影響について—報徳経済学研究会に関連して—」(『経済と経済学』第88巻、1998年、107～112頁)。
- 18 中川望「報徳経済学研究会の業績」(報徳経済学研究会編『報徳経済学研究』第一輯、理想社、1943年、8～9頁)。
- 19 前掲、仁木良和「上田辰之助における報徳思想の影響について」。
- 20 加藤仁平「日本教育史研究と報徳(下)」(『斯民』第32巻10号、1937年、113～122頁)。
- 21 加藤仁平「最近に於ける報徳教育の勃興(上)」(東京文科大学教育学会編輯『教育学研究』第6巻第2号、1937年、143～183頁所収)。「最近に於ける報徳教育の勃興(中)」(『教育学研究』第6巻第3号、1937年、281～314頁所収)。「最近に於ける報徳教育の勃興(下)」(『教育学研究』第6巻第5号、1937年、500～540頁所収)。加藤仁平『新興報徳教育』同文書院、1938年。
- 22 前掲「新興報徳教育」。富山県内小学校の報徳教育が249～292頁にわたり紹介され、鷹栖小学校の「学校仕法」論が280～281頁に含まれている。また「学校報徳社と児童常会」として同じく富山県内の事例が347～360頁にわたり取り上げられている。
- 23 加藤仁平「日本精神と教育学の方向」(大日本学術協会編輯『教育学術界』第77巻第2号、1938年5月号、6～18頁(3月23日執筆))。
- 24 加藤仁平「現代日本の教育について」(初等教育研究会『教育研究』第486号、1938年9月(7月22日執筆))。
- 25 前掲、拙著『昭和前期地域教育の再編と教員』、61～66頁。
- 26 『報徳運動100年のあゆみ』323～324頁。
- 27 加藤仁平「皇道東亜の開闢と新興報徳教育」(東京文科大学内道徳教育協会『道徳教育』第7巻第11号、1938年11月、87～110頁)。
- 28 前掲『皇道報徳教育』第一輯、87頁。
- 29 加藤仁平「皇国開闢の譲道と報徳精神」(『皇道報徳教育』第一輯、報徳教育会、1940年8月、63頁)。
- 30 「皇道報徳教育宣言」(前掲『皇道報徳教育』第一輯、巻頭言)。署名は無いが「著述年表」(加藤仁平『自伝—報徳教育の第一歩』龍溪書舎、1980年、328頁)に含まれている。
- 31 発行部数も不明、散逸も極めて激しい。管見の限り宮城県白石市図書館に第一輯・第三～五輯、神奈川県小田原市立図書館に第三輯、静岡県掛川市立図書館に第一輯の所蔵が確認されているのみである。短命に終わった背景には1940年以降の出版統制の影響があることは間違いない。
- 32 「報徳経済学研究記事 新体制と報徳生活に関する懇談会(下)」(『斯民』第36号第1号、1941年、111頁)。
- 33 「新体制下における教育家の使命」(東京文科大学教育学会編輯『教育学研究』第9巻第10号、1941年、1048～1067頁、1940年12月10日執筆)。
- 34 政策に寄り添う「新興報徳運動」、その渦中にのめり込み、「コミュニケーション行為の産物」として錬成論的な報徳教育を説く姿は当時においても異色に映じたとみられ、1943(昭和18)年に大学内で教授昇任が論じられた際に、「余りにも実践的だ」として非難を受け、加藤は同僚から「報徳を少しつや消して下さいませんか」と忠告されたほどであった。これをフォローしたのが乙武岩造だったと加藤は回顧している(『加藤仁平先生還暦祝賀会記念誌』1957年、86頁。前掲、加藤仁平『報徳に生きる』、238～239頁)。
- 35 前掲、加藤仁平『報徳に生きる』、246～248頁。日本教育学会

会長・長田新から「報徳教を都市に、工場に展開したのが加藤博士である」と推薦文が寄せられている点も検討課題の一つである。